

生きがい考 (1) —明治時代から太平洋戦争終結までの生きがいの扱われ方—

神田 信彦*

Concept of “Ikigai” (1) : Interpreting Thinking Regarding “Ikigai” from the Meiji Period to End of World War II

Nobuhiko KANDA

要約：1970年前後に「生きがい論」が活発に展開された時期あったとされる。その事実を出版物数の増減によって確認した。また明治期から太平洋戦争終結までの期間の生きがいは社会や共同体に存在した絶対的な価値（主に立身出世や忠君愛国）を生きがいとして人々がとり入れていたとする考え方について、国語辞典、新聞記事や、小説等文芸にあらわれた生きがいの語の意味を追うことによって検討した。

1. 問 題

1) 生きがいへの注目の時代

私たち多くの日本人の語彙の中に「生きがい¹⁾」がある。「生きがい」という言葉を人々が、日常どの程度自分から積極的に使用しているのかは定かでない、ほとんど使用しないという人も少なくないかもしれない。しかし、それらの人々も、時折、さまざまな媒体を通じて目にすること、耳にすること、あるいは人との会話の中で聞くことはあるだろう。

1960年代後半以降、「生きがい」や「生きがい論」がさかんに議論され（例えば、梅棹, 1970; 宮城, 1971; 熊倉, 1972）語られはじめたという²⁾。その原因として、第2次世界大戦の敗戦後しばらくはほとんどの国民が生活を維持することに追われ「生きがい」に思い至ることが生じにくかった。それが高度経済成長の流れに入ることにより人々が自身について考えるゆとりが生じたこと、その一方で技術革新によって個々人の人間性がそこなわれる、つまり疎外状況が自覚され、「生き

* かねだ のぶひこ 文教大学人間科学部

がい」が問われるようになったことにあるとされる（例えば、塩見，1969；熊倉，1972）。

それ以前³⁾に比較し1960年代後半以降、「生きがい」や「生きがい論」が盛んに論じられたことが現実であったか否かを検討してみよう。これを出版物の数によって確認すべく Webcat Plus によって「生きがい」「生き甲斐」「生甲斐」「いきがい」をキーワードとして雑誌以外の書籍を検索した結果が表1に示してある（上記キーワードを書名に含まないものは除いた）。

1960年代と1970年代を境に生きがいをタイトルに含む書籍は大幅に増えている。なお1960年代に出版された28点のうち25点は1966年以降に出版されたものであり、「生きがい論」ブームの始まりとされる時期と重なっている。1990年代までは出版点数は増加していたが2000年代は1980年代の数字を下回る点数となっている。

表1 「生きがい」をタイトルに含む書籍の出版状況

年代	生きがい	生き甲斐	生甲斐	いきがい	合計
1920 ～ 1929	0	0	1	0	1
1930 ～ 1939	0	0	1	0	1
1940 ～ 1949	0	1	0	0	1
1950 ～ 1959	1	3	3	0	7
1960 ～ 1969	19	8	1	0	28
1970 ～ 1979	188	6	3	3	200
1980 ～ 1989	213	19	2	7	241
1990 ～ 1999	302	20	3	4	329
2000 ～ 2009	198	15	2	12	227
不明	6	0	0	0	6
合計	927	72	16	26	1041

※2010年8月中旬におけるWebCatPlusの検索結果

表2 雑誌の特集タイトルに「生きがい」が含まれた件数

年代	件数
1940・50	0
1960(後半)	2
1970	12
1980	9
1990	8
2000	18
合計	49

※2010年8月中旬における
CiNiiによる検索結果

さらに、雑誌（含む学術雑誌）で生きがいを特集タイトルに含むものをみると（国立情報学研究所の論文検索ナビゲータ CiNii によって検索した結果である）、1968年6月に『思想の科学』76号で「私たちはいま何を生きがいとしているのか」を特集としたのが嚆矢であったようである。以後、1969年7月に『月間福祉』52巻7号で生きがいを拓く福祉労働」を、1970年12月に『現代教育科学』13巻12号で『「生きがい」を教えることは可能か』を、1971年1月に『潮』135号で「生きがいと宗教」を、1971年9月に「月間福祉」54巻9号で「老後の生きがいをめぐって」を、1971年3月『別冊中央公論 経営問題』10巻1号で「生きがいの設計 — キャリア・ビルドのすすめ—」を、1976年4月に『世紀』289号で「生きがいと幸福」を特集として組みそれぞれ出版された。以後も表2のように1970年代以降毎年のように何らかの雑誌で特集が組まれている。特に2000年代に入ってからにはさらにその数を増やしていることが注目される。

出版された書籍及び、雑誌の特集記事の数の検討から明らかなように、1960年代後半以降、少なくとも紙媒体において「生きがい」の扱い方が変化したことは明らかである。当初は“ブーム”と呼ぶ状況もあったのかもしれない。それが終息せずに世間に浸透し今日に至っていると考

えることができよう⁴⁾。

そうであるとすれば、生きがいは私たち日本人の生活や「生」を考えるための概念の一つとして捉えることができよう。おそらくそれまでそれほど脚光を浴びることのなかったであろう生きがいという言葉は、もともとどのように用いられ、そして現在に至ったのであろうか。本研究ではこれについて検討を試み、生きがいという言葉が私たち日本人にどのように扱われ、捉えられてきたかを検討することを目的としている。

表3 生きがいについての各論者の歴史認識

	近世以前	近代	現代	備考
見田宗介 (1970)	絶対的価値が存在し、支配 →生きがいの問題は提起されない か、瞬時に回答が出てしまう	絶対的価値が存在し、支配 →生きがいの問題は提起されない か、瞬時に回答が出てしまう	絶対的価値の不在＝ニヒリズム → 生きがい問われる	自己の存在を意味づけるもの への信仰を失ったとき、はじめて ＜生きがい＞の問題が深刻に人間をおそう。＜生き がい＞とは神の概念の不在を埋 めるものである。なぜならば神 の人間の意味とは、その人生を 根拠づけるものにほかならない のであるから(18-19頁)
	共同体の価値に埋もれた人々 →氏神の信仰にみられるように、 このような共同体そのもののシンボル	昔からあるこのような共同体の神 への信仰を基礎として、民族的な 共同体のシンボルとしての天皇に、 国民的なく生きがい＞の焦点を振 り向ける	「＜生きがい＞という問題は、その 最も深い層では、人類の歴史のな かで、生きる手段が中心の問題で ある時代から、生きる目的が中心 の時代への巨大な過渡期としての 現代を性格づける、根源的な問い として把握されなければならない。」	
		忠君愛国、立身出世		
野田正彰 (1988)	人が生きて行くことの意味づけを 集団の価値観の方に置く	人が生きて行くことの意味づけを 集団の価値観の方に置く	集団の価値観＜個人の感情	
	中世から近世までの生きがいは「死 にがい」に對置していたといえる。	戦前は国家と天皇への忠誠にいき ることが生きがいであった。	集団の価値観：経済成長の時代 は、企業の発展とそれに並行する 職場での地位の上昇	
	社会の側に生きる意義、ひいては 死に値するものが設定されていた		人が生きて行くことの意味づけを 個人の感情の方に置く：生きて いる実感、充実感を意味する	
	人は名誉、地位、操……といった 社会によって制度化された価値 を取り入れ、自己と同一化した 価値が無残にも踏みこじられた とき、生きがいがなくなったと考 えたのである			
和田修一 (2001)	私以外の他者(あるいは、共同 体や社会)による評価を通した 人生の価値づけと性質を有して いる	近世以前の生きがいに、「生きて いることの幸せ」という意味が 加わった	自己の視点	
	生きていくだけの値うち。生きて いくだけの意義		生きていく張り合い、生きて いる実感、生きていく目当て	
	ある人の生きがいは、その人の いきることが社会的(共同体的) 価値を有するという意味			

2) 「生きがい」の意味に関する論者の歴史的認識

見田(1970)、野田(1988)さらに和田(2001)は、生きがいの定義を行う文脈のなかで、それぞれ近世以前、近代および現代における生きがいの意味の枠組みが異なることを指摘し(表3参照)、それをもとにわれわれの社会が今日生きがいに注目する理由を述べている。

三者で多少の異同はあるものの近世以前の生きがいについて、当時の人々は共同体や社会の価値観に基づく行動の枠組みを生きがいとしていたと考えている。明治時代から第二次世界大戦までも近世以前と同様であったとしているが、見田⁵⁾と野田は枠組みがより明確(忠君愛国や立身出世)であったとしている。第二次世界大戦終結以降については、そうした枠組みが取り払われ、ニヒリズムから生きがい問われる(見田)やそれぞれの個人の感情が中心となる生きがい(野田、

和田)へと様相が変化したというものである。

しかしながら、これらについていくつかの疑問が生じる。先ず価値観や意義についてであるが、社会や、それぞれの個人が属する階層や生活圏の共同体に存在した価値観や意義が、それらに属する大部分の人々の生きがいになりえるものであったのであろうか。明治時代から昭和時代初期までに限って言えば、仮に政治的支配層から「立身出世」や「忠君愛国」が絶対的価値として直接的・間接的に国民に植え付けられようとしたとしても、現実的には「立身出世」を生きがいにしたのは青年男子の一部のみであったであろう。また日露戦争に勝利し、しばらくして大正デモクラシーと言われる国内政治の民主化を求める状況や労働運動が都市部を中心に生じた。こうした事実を考慮すれば、明治維新以降太平洋戦争終結までの全期間を通じて「立身出世」や「忠君愛国」が日本人の行動の絶対的な枠組み、つまり生きがい、あるいはそれらを背景とする生きがいであったとは言えない可能性も高い。

さらには、個人の感情に重みづけのある生きがいは存在しなかったのであろうか。これと関連してそれぞれの個人に発する生きる意義や価値としての生きがいは存在しなかったのであろうか。言葉を換えれば、中世、近世、および近代を通じて生きがいはただ一つの意味をもって使われたのではないだろうということである。

本論文ではこのことについて明治、大正及び太平洋戦争終結までの昭和時代を対象に検討を進め、江戸時代以前についての検討は次の機会に譲ることとする。

2. 明治時代から太平洋戦争までの生きがいの扱われ方

1) 国語辞典にみる生きがい

明治時代から今日に至るまで出版された国語辞典(以下、辞典)の類は数多に及ぶが、本研究では98点⁶⁾の辞典において生きがいがいかなる意味を持つ語として記載されているかを調べた。数多の中の一部ではあるが大凡の意味の傾向を知る手がかりになると考えられる。それらの概要については表4に示されている。

明治時代に出版され今回捕捉可能であった20点の辞典のうち1905年までに出版された辞典18点には、生きがい(ひ)が項目として取り上げられていなかった。1908年になって『大增訂 ことばの泉 補遺』(落合直幸著 大倉書店)で「世にいきながらへをる甲斐」として意味が記載されたのが「生きがい」が、記載された最初である。次いで、1911年に『辞林 四十四年版』(金澤庄三郎編 三省堂)に「生きている効験。いきている志あはせ」を意味として記載している。

以後、1943年までの間に出版された辞典13点のうち、生きがい項目として記載されなかったものは2点であった。表4の①「生きている(だけの)甲斐(効(かい))」4点、②「生きている効験、効能、効力、利益」7点、③「生きているしあはせ」は1点、②③両方を記載しているもの4点(いずれも金澤庄三郎編による辞典)、④「生きているだけのしるし」1点であった。

①と②の意味に関しては、「生きていてよい結果がえられる」という内容に集約されると考えら、③に関して、「しあはせ」は「仕合わせ」であり、今日の「幸せ」「幸福」の意味だけでなく、生きている「めぐりあわせ」による「運」のよいことを示している可能性も考えらる。つまり思いがけずよいことがあって「生きてきた甲斐」があったという可能性も考えらる。①②については生きがいの積極的意味合いが、③については消極的意味合いがそれぞれ含まれているといえよ

表4 明治時代以降の辞典における「生きがい」の意味づけ

	初掲載の年	年代								
		1868-1912	1912-1945	1946-1959	1960	1970	1980	1990	2000	合計
捕捉した辞典・辞書数	—	20	13	19	15	5	13	7	6	98
記載なし	—	18	2	2	3	0	0	0	0	25
① 生きている甲斐・効	1908	1(1)	3(2)	5(5)	1(1)	0	0	0	0	10(8)
② 生きている効験・効能・効力・利益	1911	1(1)	6(6)	2(1)	0	0	1(1)	0	0	10(9)
③ 生きているしあわせ	1911	1(0)	4(1)	1(0)	2(1)	0	0	0	0	8(2)
④ 生きているだけのしるし	1943	0	1(0)	0	0	0	0	0	0	1(0)
⑤ 生きている意義・意味	1950	0	0	3(2)	1(0)	1(0)	0	0	1(0)	6(2)
⑥ 生きていてよかったと思うこと	1950	0	0	1(1)	1(0)	1(0)	0	1(0)	1(0)	5(1)
⑦ 生きている価値・値うち	1951	0	0	7(6)	8(8)	5(2)	9(9)	5(4)	2(2)	36(31)
⑧ 生きているよこび	1952	0	0	1(0)	0	0	2(0)	1(0)	0	4(0)
⑨ 生きている張り合い	1954	0	0	1(1)	4(2)	4(3)	10(3)	7(3)	5(2)	31(14)
⑩ 生きていることが楽しく、また意味があるために感ずるはりあい	1956	0	0	1(1)	0	0	0	0	1(1)	2(2)
⑪ 生きている幸福	1959	0	0	1(0)	0	0	0	0	0	1(0)
⑫ 生きている幸福・利益	1969	0	0	0	1(0)	0	3(0)	1(0)	1(0)	6(0)
⑬ 生きるめあて	1972	0	0	0	0	2(0)	1(0)	0	0	3(0)
⑭ 生きていく上での充足感	1983	0	0	0	0	0	1(0)	0	0	1(0)
⑮ 生きていることの幸福感	1988	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	1(1)
⑯ 心の支え	1994	0	0	0	0	0	0	1(0)	2(1)	3(1)
⑰ 生きるに値するもの	1995	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	1(1)

注 括弧内の数値は第1の意味として掲載された辞典・辞書数を示す

う。④は①②に類するものであるだろう。

明治時代末期に出版された2点を例外に18点の辞典に生きがいの語が項目として存在しなかったことは、生きがいという語が一般にあまり使用されてはいなかったか、あるいは使用されていても著者・編者たちさらには一般からも重要度の低い言葉として認識されていたものと考えられる。このことと関連すると思われるが、明治時代末期から太平洋戦争中である1943年までに出版された辞典における生きがいの意味づけは、積極的であるか、消極的であるかはともかく生きてきた（生きている）ことへの「成果」を意味として掲げるだけであった。

1950年代になると、それまでの「成果」としての意味づけをする辞典に加え、生きがいの意味に「感情をあらわす」ものや他の「認知をあらわす」ものが現れてきた。

表4の⑤「生きている意義・意味」、⑦「生きている価値・値うち」は、主に「認知をあらわすもの」つまり「認知的評価」を示すものと思われる。生きてきた（生きている）ことへの「成果」の評価的側面を強調する意味づけであると言える。これには先に示した野田（1988）、和田（2001）らが指摘した意味での生きがい、他者や社会との関係の中で「自分が何らかの役に立っている」「貢献している」という経験を背景に得られるものを意識しての意味づけであろう⁷⁾。その一方で「よいことがある（ない）」から「生きている価値・意味がある（ない）」へという比較的単純な繋がりも否定できない。⑬「生きるめあて」、⑯「心の支え」及び⑰「生きるに値するもの」は同じく「認知的なもの」であるが「生きる目標や対象」を指していると考えられる。

⑥「生きていてよかったと思うこと」、⑧「生きているよろこび」、⑨「生きているはりあい」、⑭「生きていく上での充足感」、⑮「生きている幸福感」は主に「感情をあらわすもの」ととらえることができよう。

太平洋戦争終結後数年にして、生きがいは意味の分化を経験したのであろうか。そう考えるより、生きがいにはもともとさまざまな意味合いが含まれ、日本人の間で使用されていたと考える方が納得がいく。では、明治時代から太平洋戦争までの期間、生きがいはどのように用いられてきたのであろうか。以下では紙媒体の資料をもとに検討を行う。

2) 新聞記事に現れた生きがい

生きがいが新聞記事の中でどのような意味として扱われているかを見ることも、その時代の生きがいの扱われ方を知る手がかりとなろう。表5は読売新聞社の「ヨミダス歴史館」及び朝日新聞社、記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」で明治時代から太平洋戦争終結までの期間の記事について「生きがい（生甲斐、生き甲斐、生効等）」を検索した結果である。約80年間にあらわれた記事は20件と少ないものであった。1870年代の3件の読売新聞記事では「生きがい」ではなく「生きた甲斐」などで表現され、1884年になって「生き甲斐（生甲斐）」が使われ、その後のほとんどが「生き甲斐（生甲斐）」を用いている。

ではどのような意味で用いられているかをみれば、「立身出世」に関わる生きがいの記事は、③（読売新聞1877（明治10）年12月5日付記事）の市井の人の官吏を目指しての猛勉強ぶりの成果を伝える記事が該当すると考えられる。「忠君愛国」に関わる生きがいを扱った記事は、⑰（朝日新聞1938（昭和13）年7月12日付記事）、⑱（同紙1940年10月30日付記事）、⑲（1940年11月22日付記事）、及び⑳（同紙1944年7月3日付記事）をあげることができる。「忠君愛国」の意味を含む生きがい記事は、日中戦争及び第二次世界大戦の時期に限定されたあらわれ方をしている。

その他の記事は、個人的な感情の水準での「生きている張り合い」（⑪⑭⑯）、「生きているよろこび」（②⑨⑩⑮）、「生きている充実感」（⑬）が主たる意味を持つ生きがいと、絶対的価値を背景として持たない「生きている価値・意味」（①④⑤⑥⑦⑧⑫）が主たる意味を持つ生きがいとに分類できるよう。明治時代以降太平洋戦争終結までの新聞紙上に現れた使用例は、少ないものの生きがいの意味はさまざまであり、社会的に著名な人ばかりでなく市井の人々によってもそれらの意味として生きがいが使われたことを示すものであると言える。

3) 文芸等に現れる「生きがい」の使われ方

(1) 文中に現れる生きがい

次に小説等の文の中で生きがいがどのように用いられているかを探るため著名な作家の文を追ってみた⁸⁾。結果は表6に示した通りである。紙幅の関係で詳細を説明し論じることはできないが、今回の調査で明治期に最も古く生きがいの語を使っていたのは、二葉亭四迷の『浮雲』（1887-1889）で、「入塾が出来ない位なら生きている甲斐がない」⁹⁾、次いで幸田露伴の『五重塔』（1892）では、「大工となつて生てある生甲斐もあらるゝといふもの」¹⁰⁾「つくづく頼もしげなき世間、もう十兵衛の生き甲斐なし」¹¹⁾と主人公たちに語らせている。これらを含め34作品45例を得た。

これら対象となった表中の生きがいに「立身出世」や「忠君愛国」の意味を持つあるいはそれ

表5 明治期から第二次世界大戦までに新聞にあらわれた「生きがい」

番号	掲載紙	発行年月日	見出し部分	本文中	説明
①	読売新聞	1876年3月26日		斉の景公ではないけれど千騎の馬を持っても民に徳を稱せられねば <u>生きた甲斐</u> ないと	「寄書（よせぶみ）」の一文から
②	読売新聞	1876年8月8日		随分おもったよりも大業も成就し望みも貫ぬき人間に <u>生まれた甲斐</u> があり又人にも言われぬように	「寄書（よせぶみ）」の一文から
③	読売新聞	1877年12月5日		末々は官吏にでもなりたい毎日手紙を配り足を草臥らして死んでは人間に <u>生まれた甲斐</u> がない	市井の土田という人の猛勉強ぶりとその成果を報じた記事
④	読売新聞	1884年2月13日		私さえ無くば其方もチツトは楽になろうに斯う古いぼれて <u>生甲斐</u> のない者が永く厄介になるは心苦しい	投身自殺記事
⑤	朝日新聞	1897年7月3日		お安に捨てられては <u>生きて居る甲斐</u> の無いことを繰り返し認めしかば	離婚した元妻への未練から、置き手紙を残し姿を隠した男の記事
⑥	朝日新聞	1913年12月20日	生甲斐がありませぬ	斯う云う事になっては最早私も <u>生きて居る甲斐</u> がありません	山形にある陸軍32連隊から姿を消した三等主計の記事中のその父親のことば
⑦	読売新聞	1916年1月28日		忙しく其の日其の日を暮らしているの生活を人は生甲斐のあるようにいふけれど、	「一日一信」から
⑧	朝日新聞	19203月12日		否それだから、人生は面白いのである、意味があるのだ。吾々には <u>生甲斐</u> があるのだ。	御厨白村は「象牙の塔を出て七瀬巧者」で人間社会の欠陥を指摘しつつも
⑨	朝日新聞	1923年7月5日	只生甲斐ある幼稚園生活	神のような子供と一緒にいる時だけ <u>生き甲斐</u> を感じます	東京市教育会から教育功績表彰を受けた女性の談話から
⑩	読売新聞	1927年3月30日		幸い私の書くものを喜んで読んでくれる少量の人たちが、この世に存在してくれているので、わたしはせめてもの <u>生き甲斐</u> を感じて売る次第である	辻潤「にひるの瀧」から
⑪	朝日新聞	1934年11月28日	今の努めに不満足生甲斐のある仕事が見たい	私がこの世に <u>生まれて来た甲斐</u> のある仕事が見たい	恵まれた家庭に育ちタイピストをしている24歳の女性の「女性相談」への投稿から
⑫	朝日新聞	1935年5月4日	生甲斐ある新しき道	女性も人としての社会生活への参加等には女性をして、新しい <u>生甲斐</u> の世界を見いだせる	女性運動家である河崎なつ子の「女性批判 ニュースから問題を拾って」から
⑬	朝日新聞	1936年8月2日		余はこの世界的な劇を眼前に見たことを、四十年の生涯において最も <u>生き甲斐</u> あるものに感じた	西条八十がベルリンオリンピックの開会式を視た報告手記から
⑭	朝日新聞	193511月20日	生甲斐なき身の上 獨立も結婚の當てもなく		貧しい家庭に育ちお手伝いさんをしている18歳の女性の「女性相談」欄への投稿から
⑮	朝日新聞	1937年2月17日		サンサンとてる朝日にふくらむ鉢の <u>一花</u> でもみたら、その一瞬しみじみと <u>生甲斐</u> を感じて、	彫刻家で元文相秘書官の岩井尊人に蘭栽培の秘訣を聞いた記事から
⑯	朝日新聞	1937年4月15日	生甲斐のあるいまの生活	パリの苦しくとも <u>生甲斐</u> のある生活等々	ショパンコンクールに日本人として初参加し15位（後に聴衆賞）となった原智恵子の手記から
⑰	朝日新聞	1938年7月12日	生まれて初めて絵筆の生甲斐 傳單とポスターに従軍半歳	事変下の支那へ来て初めて芸術家としての <u>生甲斐</u> を感じました	中国で日本陸軍報道部囑託画家となった人の活動を取り上げた記事から
⑱	朝日新聞	1940年10月30日	生甲斐ある生活 最低生活と最高名誉		記事「新體制問答」中、三国同盟締結を発表した近衛首相のことばの趣旨への読者の質問への回答から
⑲	朝日新聞	1940年11月22日	生甲斐のある日を国民の聲		興亜奉公日の修正に関する世論調査の中間結果についての見出しから
⑳	朝日新聞	1944年7月3日	深夜に揚がるつばきの凱歌 いまぞ知る乙女の生甲斐		記事「決勝増産戦を推進する若き力」から

を背景に持つと考えられたものは、太宰治の『十二月八日』のみであった。真珠湾攻撃の成功の報に接した主婦に高揚した思いを語らせ、辛いどころか「こういう世に生まれて生甲斐さえ感ぜられる。」と言わせている。ここでは愛国心を背景に持つ「はりあい」や「充実感」としての生きがい示されている。1941年12月8日には、当時の多くの日本人が類似した気持ちを抱いたのかもしれない。

他の用例は、絶対的な枠組みではなくそれぞれの個人の事情に基づいて表現される生きがいであり、主に「生きている喜び」「生きているはりあい」「生きている価値」「生きている意味」あるいはそれらの複合と読み取れると考えられるものがほとんどであった。

表6 明治期から太平洋戦争終結までの文芸にあらわれた生きがいの使用例

発表年	作品名	作者	生甲斐・ 生き甲斐	生きている 甲斐	他の表現	備考
1888～1889	浮雲	二葉亭四迷		1		
1892	五重塔	幸田露伴	2			
1893	活人形	泉鏡花	1			
1894	瀧口入道	高山樗牛	1			
1896	めきまし草	森鷗外(?)	1			
1899	不如帰	徳富蘆花	1			
1906	草枕	夏目漱石	2	1	1	住むに甲斐ある
1907	虞美人草	夏目漱石		1		
1908	虚弱	三島霜川	1			生効
1908	三四郎	夏目漱石		1		
1908	坑夫	夏目漱石	1			
1909	それから	夏目漱石	1			
1910	思い出すことなど	夏目漱石	1			
1912	悪魔	葛西善蔵	1			
1916	将来の宗教	山田三良				生き効い
1915～36	貝殻追放	水上龍太郎	3	2		
1917	天守物語	泉鏡花	1			生效
1919	芍薬の歌	泉鏡花	1			生效
1920～21	新編 近代美人伝(上)	長谷川時雨	2			
1920	真珠婦人	菊池寛	1			
1920	出世	菊池寛	1			
1921	続金色夜叉	尾崎紅葉	1			生効
1928	大仏と小仏師	岡本かの子	1			
1929	若水の話	折口信夫	1			生き詮
1933	みみずのたはこと	徳富健次郎			1	生きて甲斐なけん
1934	踊る地平線	谷譲次	1			
1935	ダス・ゲマイネ	太宰治	1			
1937	閉戸閑詠	河上肇		1		
1939	女生徒	太宰治	2			
1939	日本橋あたり	長谷川時雨			1	有甲斐なし
1939	皮膚と心	太宰治	2			
1940	兄たち	太宰治	1			
1941	新ハムレット	太宰治	1			
1942	十二月八日	太宰治	1			
			35	7	3	

(2) 題目に「生きがい」を含む文

次に題目に生きがいを含む文についてみると、1907年(明治40年)に出版された村山鳥逕の『乾胡蝶』に短編『生効』¹²⁾(初出は1906年)がある。文字通り「生きがい」である。その中で最終的に作者は、人の行いが間接的にでもさまざまな場面で他の人の役に立つことがあればその人には「生効」があるのだと主人公に語らせている。世間の中で地道に生きていることの中にその人自身に自覚はなくとも生きがいがあると作者は考えている。

キリスト者であった奥村多喜衛は、1915年『日曜講話』の中の「生甲斐ある生涯」という文で、成功の人生を望むのはよいが不正をして達成することはよろしくない。成功しなくとも勤勉・修養を重ねることが大事であるという趣旨のことを述べている。結果ではなく、生きる過程のあり方及びその心構えとしての期待に重みを置いた生きがいにたいする捉え方である。

また、大正時代末(1926年)に後藤新平は『公民読本—少年の巻』の中で「生き甲斐ある生活」という一文を書いている。どのような職業に就くとしても「安んじ楽しんで働くことを生き甲斐ある生活といふのである。」と説き、自分にあった仕事に励み、人間関係を大事にし、世の中に役立つ人として生きること生きがいがあるというのである。こうした意味での生きがいのある生活を送ることは人間らしい生活なのだとも言っている。この文の最初の部分で後藤は、大政治家や大実業家を目指す、つまり「立身出世」を志しても誰もがそれを実現できるものではない、という趣旨のことを述べている。当時の人々が「立身出世」を生きがいという言葉をどの程度結びつけたかどうか定かではないが、そうした考え方が一方に存在していたのは間違いでないことであろう。しかし後藤はそれは多くの人々に目指すものではなく、日々の仕事や生活を平安に送ることの中に生きがいが経験される、と述べている。

1934年には平川虎臣が『生きがいの問題』¹³⁾という短編小説を書いている。本文中には生きがいという言葉はあらわれない。当時の日本社会で貧困に喘ぐ人たちを題材にして描いている。その中で必ずしも生きる目的が明確ではない主人公が急性の蓄膿症にかかり手術を受ける(結果として治癒へ向かう)。一方、生きる目的が明確でありながら結核のためそれが果たせないコミュニスト青年は自殺してしまう。両者の生と死が交錯し、「生きる目的」としての、さらには人としての普遍的な「生きる意味」としての生きがいと問われているように思われる。これは読み手によって解釈が異なる可能性はあるが、「立身出世」や「忠君愛国」を背景にする生きがいを強調しているのではないことは確かである。

ここで取り上げた4つの文は、いずれも生きがいを絶対的価値や枠組みからとらえたものではないことは明らかである。しかしこうした内容の文が書かれるということは、その一方でそれらとは異なる考え方も当然あったということ意識しなければならない。

4) その他の出版物にみられた生きがい

内閣情報部が1938(昭和13)年から発行し始めた『写真週報』の18号(同年発行)には、「貯蓄模範村を訪ふ」の記事中に「村の人、又は町の人みんなが皆生甲斐に満ちた生活ができて、お金がどしどしたまり、同時にお國の為に尽くせたら...」、249号(1943年発行)では記事みだしとして「戦ふ國の戦ふ生活 この中にこそ生甲斐あり」があった。いずれも国策、愛国心に関わる記事であり、生きがいはその文脈の中で使われている。また『家の光』(昭和16年6月号)には、「生甲斐は肌身離さぬ故国便り(北支派遣 斧田勝治)」が掲載されていた。ここでの生甲斐は生きる

支えという意味として受けとることができるであろう。

3. おわりに

ここまで新聞記事及び文芸等にあらわれる生きがいについて検討を行ったが、『立身出世』や『忠君愛国』そのもの、あるいはそうした価値の枠組みを背景にした生きがいを表現するものは、太平洋戦争直前から戦中にかけてのいくつかの新聞記事を中心に見られただけであった。それら以外では生きがいはさまざまな意味で用いられていたことが明らかとなった。明治維新や太平洋戦争それぞれの時期に政治的支配層によって形づくられた価値の枠組みが強烈な印象をわれわれにしばしば与えていることは否めない。それがステレオタイプの生きがい観を生み出す素地になっているのであろう。前に紹介した論者たちの視点はそうしたことが影響しているのではないか。

前の論者たちの考える意味での生きがいをその当時の人たちの中には観念として持っていた人たちも少なくなかったであろう。しかしそれが実際の生活の中で「生きがい」という語で会話や文の中で表現されることは少なく、生きがいはいくつかの意味を持つものとして今日と同様に表現されていたのであろう。

生きがいは、基本的には神谷（1966）が指摘するように「生活のふくみ」や「生活のふくらみ」を含むものであるのだらうし、含むものであったのであろう。おそらくもともとは日常生活の中での素朴な経験こそ生きがいに関連するものであったのではないか。これは次の検討課題のひとつである。

注

- 1) 「生きがい」は「生甲斐」「生き甲斐」「生き効」「生効」「いきがい」などと表記されるが、本論では原則として「生きがい」を用いる。
- 2) 神谷（1966）はその著『生きがいについて』の「おわりに」で、「さいきんになって日本の一般の社会でも、生きがいについての調査や論議がとくに活発に行われるようになった。（中略）雑誌、新聞紙上に生きがいという文字がさかんに目につく。」（284頁1-4行）という記述がある。これはすでに1960年代前半においても「生きがい」に社会が関心を向け始めていたことをしめすものかもしれない。1960年から1961年にかけて大野明男と西浦義道の間で仕事に生きがいを見出すべきか否かの論争が行われた（『思想の科学』誌上）。
- 3) 1960年代以前にも生きがい論的な見解を述べる論者もあった。塩尻公明は1952は『理想』に「生甲斐について」を書き人生論的な生きがい観を述べている。
- 4) ちなみに、時事通信社は2010年8月に1357名を対象に「生きがいに関する世論調査」を行った。「どのようなことに生きがいを感じるか」という内容の問いに対する複数選択回答による結果（有効回答1036名）は、「趣味・娯楽」（51.2%）、「家族やペットのこと」（49.5%）、「仕事・学業」（34.3%）、「友人など家族以外の人との交流」（32.6%）であった。
- 5) 見田（1970）には副題として「かわる日本人の人生観」とあり、生きがいを人生観と同等の意味でとらえている可能性がある。
- 6) 辞典での生きがいの意味を調べるにあたっては、主に文教大学図書館、国立国語研究所研究図書室所蔵の辞典及び国立国会図書館の近代デジタルライブラリーにある電子化された当時の辞典を閲覧した。なおこれらの中には同一辞典で版を重ねたものもそれぞれ1点として数えているものがある。

- 7) 和田(2001)は「今日ではこれはそれ程馴染みのないものであろう。というのは、この生きがいの意味は、『ねうち』にしろ『意義』にしろ(ある事柄の達成に貢献するという意味での)機能的な側面での人生の価値ということであり、私以外の他者(あるいは、共同体や社会)による評価を有しているからである。」説明している。これは野田(1988)が集団だけを枠組みとしている点と異なっている。
- 8) 主に Web 上の青空文庫上の各作品の HTML ファイルに対し「生きがい」「生甲斐」「生き甲斐」「生効」「生詮」及び「甲斐」に関して検索を行った。該当した文については、出版されている全集等を可能な限り参照し確認を行った。
- 9) 主人公の文三の従姉妹お勢の子どもの頃の描写に「入塾などとは以の外、トサ一旦は親の威光で叱り付けては見たが、例の絶食に腹を空せ、『入塾が出来ない位なら生ている甲斐がない』ト溜息雑ぜの愁訴、』がある。
- 10) 主人公の大工十兵衛が世話になっている棟梁の源太を語って「御上人様、五重塔は百年に一度一生に一度建つものではござりませぬ、恩を受けて居ります源太様の仕事を奪りたくはおもひませぬが、あゝ賢い人は羨ましい、一生一度百年一度の好い仕事を源太様は為るゝ、死んでも立派に名を残さるゝ、あゝ羨ましい羨ましい、大工となつて生てゐる生甲斐もあらるゝといふもの」と言っている。
- 11) 「上人様のお召しなさるとか、七蔵殿それは真実でござりまするか、あなさけない、何ほど風の強ければとて頼みきったる上人様までが、この十兵衛の一心かけて建てたものを脆くも破壊るかのよう思召されたか口惜しい、世界に我を慈悲の眼で見て下さるただ一つの神とも仏ともおもうていた上人様にも、真底からはわが手腕たしかと思われざりしか、つくづく頼もしげなき世間、もう十兵衛の生き甲斐なし」
- 12) 一時、零落した主人公が移り住んだ路地裏のぼろ家の近所の長屋で提灯の籤を作る仕事をしている老夫婦と話す機会があり、64歳の老人が「まあいゝやな、で先生、よく世間では生効のない奴といゝますが、俺位つまらないものはないと、つくづく此頃考えこんぢめました。職が提灯のひご引き、つまらない商売でさあ、ようがすか、全て死んで居るようなものだ。朝から晩まで竹を泣かせて喜んで居るんでさあ、喜びもしませんがね、これをしなければ、飯が喫へねえてんだからやりきれねぬ。全躰これでも根からの籤引では無いんで、元は是でも、是でも元は…」と。その後、主人公は中学の教員となり住まいを移した。あるとき主人公は電車に乗り老夫婦の五人の子どもたちがさまざまな形で世の中に役立っていることを想像する。最後に、生効のないといった老人もじつは提灯がいろいろな場面で人の役に立っているのだから生効がないどころではない、という思いに至るのである。
- 13) 昭和初期の貧しい人たちの住む長屋で暮らす作家志望の青年弓良三は急性の蓄膿症で不快な状況にある。病者になることによって周囲の人への見方がこれまでと異なってくる。親しくしている結核で余命幾ばくもない青年コミュニスト波多至。自分の病が原因で両親がけんかし母が投げた俎があたり父が死んでしまう。母は警察に逮捕され小五の妹は学校をやめ兄の至の看病をする。上の妹は仕事を持っており弓と親しい。弓は原稿が漸く売れ蓄膿症を治す手術を受け快方に向かう。そのような矢先、至が自殺したという知らせが入る。

文 献

- 後藤新平 1926 生き甲斐について 『公民読本』 一少年の巻一 東京寶文館
- 神谷美恵子 1966 『生きがいについて』 みすず書房
- 平川虎臣 1934 『生き甲斐の問題』 中央公論 昭和九年 七月臨時増刊号 (引用は『平川虎臣作品集』(1984, 武蔵野書房))
- 時事通信社 2010 『『生きがい』に関する世論調査』 (調査実施機関 社団法人 中央調社) (2010/10) <http://www.crs.or.jp/backno/No636/6362.htm>
- 熊倉弘 1972 『生きがい』の構造について 岩手大学教育学部研究年報, 32, 4部 (1), 35 - 48.

- 見田宗介 1970 『現代人の生きがい 一変わる日本人の人生観一』 日本経済新聞社
- 見田宗介 1971 『現代日本の心情と論理』 筑摩書房
- 野田正彰 1988 『生きがいシェリング 一産業構造転換期の勤労意識一』 中央公論社
- 毎日新聞社 1989 『昭和史全記録 一Chronicle 1926-1989一』 毎日新聞社
- 村山鳥逕 1907 『生効』（『乾胡蝶』所収） 祐文社
- 大野明男 1961 論争・生き甲斐とはなにか 思想の科学, 33, 36-41.
- 奥村多喜衛 1915 『日曜講話』 警醒社書店
- 塩見淳一 1969 生きがいの職業的意義 滋賀大学教育学部紀要・人文科学・社会科学・教育科学, 19, 53-60.
- 塩尻公明 1952 生甲斐について 理想, 231, 1-10. 理想社 (引用は、塩尻公明 1953 『生き甲斐の追求』 社会思想社 現代教養文庫版から)
- 梅棹忠夫 1981 『私の生きがい論』 講談社
- 和田修一 2001 近代社会における自己と生きがい：『生きがいの社会学 一高齢社会における幸福とは何か一』 高橋・和田編 弘文堂